

9月講演会の報告

～ヌード芸術の東西～

12月8日、ルナ・ホールにて神戸大学・大学院教授 宮下規久朗氏による「ヌード芸術の東西」と題しての講演がありました。参加者数は149名、担当は企画Gでした。講演の要旨は次のとおりです。

ヌード大国・日本

日本は駅前や公園など公共の場にヌード彫刻が多く設置されている点で世界でも特異な「ヌード大国」です。西洋においてヌードは美術館の中に存在するものであり、屋外に置かれるることは稀です。これは西洋における「ヌード」の形式を、その根底にある思想や文脈、特にエロティシズムや理想美の追求とは異なる形で受容した結果生まれた風景です。本講演ではなぜ日本がこのような特異な状況になったのか、西洋における「ヌード」の概念と歴史、そして日本における「裸体」や「刺青」の文化と比較しながら紐解いていきます。

西洋における「ヌード」と「ネイキッド」

西洋美術において、「ヌード (Nude)」と「ネイキッド (Naked)」は明確に区別されます。ケネス・クラークが論じたように、「ネイキッド」は単なる「裸」であり、羞恥や貧困を連想させることもありますが、「ヌード」は芸術的に再構成され、理想化された「裸体芸術」を指します。

西洋におけるヌード芸術には、大きく分けて4つの意味的機能があります。

1. 理想美の視覚化：古代ギリシャに始まる、人体こそが最も美しい形態であるという考え方です。「カノン」と呼ばれる人体比例(プロポーション)が建築にも応用されるなど、美の基準となりました。

2. 寓意の記号：真実、自由、正義などの抽象的な概念を人間の姿、特に裸体で表



ダビデ像 (ミケランジェロ)

現する伝統です。「裸の真実」やドラクロワの「民衆を導く自由の女神」などがこれに当たります。

3. エロスの表現（エロティシズム）：本来、西洋のヌードは男性が男性のために制作したものであり、エロティックな視線（窃視性）を前提としています。
4. 造形的実験の場：近代以降、ピカソやマティスのように、従来の美の規範を解体し、新しい造形を追求するためのモチーフとしてヌードが用いられました。

西洋ヌード芸術の変遷

西洋の裸体表現は、旧石器時代の「ヴィレンドルフのヴィーナス」のような豊穣を祈る太母神像に始まります。古代ギリシャでは、当初は直立不動の青年像（クーロス）が作られましたが、紀元前480年の「クリティオスの少年」で片足に重心をかける「コントラポスト」が導入され、人体に動きと生命感が生まれました。

女性ヌードに関しては、プラクシテレスによる「クニドスのアフロディテ」が最初の記念碑的作品となり、恥じらい

ながら手で局部を隠す「恥じらいのヴィーナス」のポーズが定着しました。ルネサンス期にはジョルジョーネやティツィアーノによって「横たわる裸婦（リクライニング・ヌード）」の伝統が確立され、マネの「オランピア」やアングルの作品へと受け継がれていきます。



クニドスのアフロディテ



マネ 「オランピア」

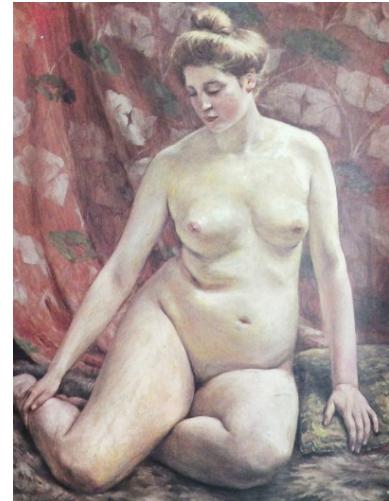
日本の「裸」文化と西洋的ヌードの受容

一方、日本には「ヌード」という概念はありませんでしたが、日常的な「裸（ネイキッド）」は溢っていました。混浴の銭湯や労働者の姿など、幕末に来日した外国人は日本人が裸であることに驚き、「極東のギリシャ」と呼んだほどです。

しかし、日本における裸はあくまで風俗であり、西洋のような理想化された芸術形式ではありませんでした。浮世絵や春画に見られる裸体も、着衣の柄や性器の強調に重きが置かれ、人体構造としては不自然なものが多く見られます。

明治政府は文明国としての体面を保つため、こうした公共の場での裸（肌脱ぎ）を禁止しました。それと入れ替わるように西洋から「ヌード芸術」が輸入されましたが、当初は激しい拒絶反応に遭いました。黒田清輝が発表した裸体画は論争を巻き起こし、腰から下を布で隠すよう命じられる「腰巻事件」なども発生しました。

また、日本の美意識において、女性の美しさはプロポーション（骨格や線の美）ではなく、肌の白さやきめ細かさ（面の美）に見出されてきました。そのため、西洋的な肉体表現と日本人の身体感覚の間には乖離があり、小出檜重（こいでならしげ。日本独自の裸婦表現を確立したとして高く評価される。芦屋市立美術博物館に復元されたアトリエがある。）のように、日本人の肌の質感を油彩で表現しようとする試みもなされました。



黒田清輝 裸体美人

日本独自の身体芸術「刺青」

日本にはヌードとは異なる独自の身体芸術として「刺青」があります。かつては「魏志倭人伝」に記述があるように一般的な風習でしたが、後に刑罰として利用され、江戸時代には再び「粹」な装飾として爆発的に流行しました。特に『水滸伝』の影響で全身に彫り物を入れることがブームとなり、飛脚や火消しなど肌を露出する職業の人々の間で定着しました。

明治に入り政府は刺青を禁止しましたが、皮肉なことに来日した英国王室やロシア皇太子など、西



明治期の写真

洋の要人たちがこぞって日本の刺青を彫って帰りました。戦後、G H Qの圧力により再び合法化されましたが、依然としてアウトローのイメージは強く残っています。刺青は単なる装飾ではなく、心と体が不可分である日本人の身体観に基づいた精神と肉体を分離しない「身（み）の芸術」であるといえます。

戦後のヌード彫刻ブームと現代の課題

戦後、日本では裸体へのタブー視は残存するものの西洋型ヌードが芸術として確定し、団体展のブロンズ彫刻や公共彫刻が流行し、公共空間へのヌード彫刻設置が急増しました。

そのきっかけは、彫刻家・菊池一雄による「平和の群像」です。軍国主義からの脱却と平和の象徴として裸体の女性像が肯定的に受け入れられたことで、全国の駅前や公園に「平和」や「自由」といったタイトルをつけただけのヌード彫刻が乱立することになりました。

しかし、本来西洋ではエロティックな意味合いを含むヌードを、脈絡なく公共の場に置く日本の状況は、外国人から見れば奇異であり、時には女性蔑視として批判の対象にもなります。近年では、静岡や徳島などで公共のヌード彫刻が撤去される事例も増えていますが、グローバル化やジェンダー観の変化に伴い是非が問われる現代において、単に撤去するのではなく、設置された歴史的背景や日本独自の身体観を含めて議論し見つめ直す必要があります。

一方で、写真の世界では春画的伝統の継承として荒木経惟の『センチメンタルな旅』のように、妻との私的な関係性や死までを記録した「私写真」という日本独自のヌード表現も生まれました。



菊池一雄「平和の群像」

質疑応答

スポーツ界における刺青への対応の日米の違いについて

世界のヌードと刺青の歴史、日本との比較を踏まえ、現在のスポーツ界における「刺青（タトゥー）」の扱いの違いについての疑問です。具体的には、日本のス

スポーツ界では刺青が全面的に禁止されているのに対し、欧米、特にアメリカの大リーグ（MLB）やアメリカンフットボール（NFL）では、有名選手が堂々と刺青を露出してプレーしています。この決定的な違いは国による政策的な背景によるものなのでしょうか。

——日本は世界の中で唯一と言っていいほど刺青に対して異様に厳しい国です。その要因の一つとしてメディア、特にNHKの方針が厳しいことです。具体例として、過去に歌手の安室奈美恵が紅白歌合戦に出場する際、ワンポイントのタトゥーを隠すことが条件になったとされるエピソードがあり、テレビ放映において刺青がタブー視されているのが現状です。

このような風潮のため、海外で活躍する日本人サッカー選手などが、現地の文化に触れて刺青を入れたいと思っても日本で活動できなくなるため、我慢を強いられている実情があります。

しかし、一方で、近年は多様性の観点から、日本国内でも過度な規制に対する反省や見直しの動きが出始めています。かつては銭湯や温泉で一律に入店拒否されていましたが、現在は専用のシールで隠せば入浴を許可するなど、柔軟な対応をとる施設が増えています。また、ファッション目的だけでなく、ニューギニア等の民族的な習慣（トライバル）として刺青を入れている人々を一律に排除して良いのかという議論も起きており、従来の一律禁止という姿勢に疑問が呈されています。

アメリカ等の欧米諸国では刺青を政策的に禁止する方向性は全くありません。欧米では刺青があること自体で個人が偏見を持たれることはないのです。アメリカでは一般市民のみならず、公職である警察官でさえ多くの人が刺青を入れています。これでは「どちらが悪人かわからないほど」とも言え、日本とは比較にならないほど社会的に許容されているのです。

日本人がアメリカのように警察官まで刺青を入れるような極端な状況にすぐに馴染むことは難しいかもしれません、現状は厳しすぎると判断しており、今後は、多様な意見が増えることで社会の認識も変化していくと予測され、もう少し規制を緩和（解禁）しても良いのではないかと思います。

（広報G 兵東勇記）



宮下規久朗氏

